

シンポジウム 「多様」と「特異」の作家

——いま、クロソウスキーを(よ)みなおす——

Relire Klóssowski Aujourd' hui

森元庸介

松本潤一郎

千葉文夫

須田永遠

酒井健

兼子正勝

大森晋輔

【登壇者】(五十音順)

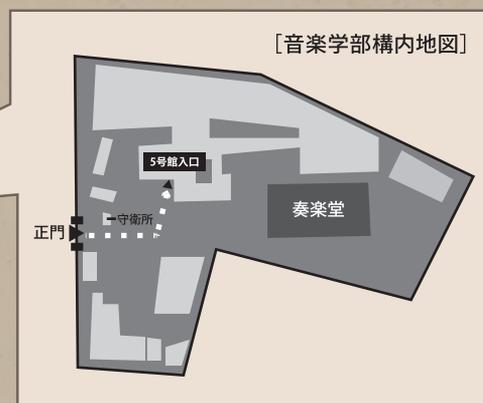


2018年2月4日(日)

10:30~17:45(開場10:00)

入場無料・予約不要

東京藝術大学 音楽学部 5号館1階109教室



後援:東京藝術大学音楽学部

連絡先:大森研究室 東京藝術大学音楽学部5号館2階208

E-mail:omori.shinsuke@ms.geidai.ac.jp

ピエール・クロソウスキーウェブサイト:<https://pierreklossowski.tumblr.com/>

ツイッター:https://twitter.com/s_oomr?lang=ja

※本シンポジウムは、日本学術振興会(JSPS)科研費「クロソウスキーにおける「神の死」の概念の射程」(大森晋輔、基盤研究(C)課題番号17K02586)の助成を受けたものです

作家、思想家、小説家、翻訳家、画家、さらには俳優など、さまざまな顔をもつピエール・クロソウスキー(1905-2001)。神学、宗教学、神話学、哲学、文学、美学、芸術学などにまたがる、広範かつ多様な関心に貫かれたその特異な作品群は、20世紀のフランス文学・思想においてきわめて分類の難しい、独特の位置を占めている。しかし、本シンポジウムの目的は、そうした分類を新たに試みるものではないし、この人物の何らかの全体像を提示することでもない。その活動の多様なありようを踏まえ、そこで複雑に絡み合った糸のようなものをいったん解きほぐし、その作品から出発してどのような思考の局面を切り開いていくことができるのかを考えてみたい。この作家を単独で扱ったものとしてはおそらく日本で初となるこのシンポジウムをきっかけに、クロソウスキーをめぐる言説がこれまでよりいっくらか風通しのよいものになっていくのならば幸いである。

Programme

開会の辞(趣旨説明) 10:30

セッションⅠ 神(々)との対峙 司会:松本潤一郎(就実大学准教授)

10:40-11:20 大森晋輔(東京藝術大学准教授)

「クロソウスキーにおけるキルケゴール——1930年代後半の活動から」

11:20-12:00 酒井健(法政大学教授)

「神と神々のゆくえ——20世紀フランス思想における神学の問題」

セッションⅡ 倒錯と政治性 司会:酒井健(法政大学教授)

13:00-13:40 森元庸介(東京大学准教授)

「倒錯? 『我が隣人サド』から」

13:40-14:20 松本潤一郎(就実大学准教授)

「ニヒリズムと再神秘化——クロソウスキーの政治的思考」

セッションⅢ イメージをめぐって 司会:大森晋輔(東京藝術大学准教授)

14:30-15:10 須田永遠(東京大学大学院博士課程)

「活人画とクロソウスキー」

15:10-15:50 兼子正勝(電気通信大学教授)

「得られるのか、得られないのか
——イメージ概念史におけるクロソウスキーの位置」

15:50-16:30 千葉文夫(早稲田大学名誉教授)

「ロベルトの変容——情念定型とシークエンス」

全体討議 16:40-17:40

閉会の辞 17:40(17:45終了)